

ここから これから

NPO法人 北海道 NPO サポートセンター  
2019年8月号 [季刊発行]

Vol.  
1

# からから 便り



ここから これから からから便り—発行に際して  
2019年度 北海道「道内避難者心のケア事業」の内容

なんぼろキャンプでひろがる輪！  
「福島の子どもたちを南幌に招待する会」

本州と北海道 北海道開拓の歴史から

寄稿 「1ページのたより」

ここから これから からから相談  
自分らしく、生き生きと働ける場所を！  
～アクティブシニアサポートセンター～

北海道における被災避難者の受入状況

編集後記

# ここから これから からから 便り —発行に際して

特定非営利活動法人北海道 NPO サポートセンターは、2019年度、北海道「道内避難者心のケア事業」の委託を受け、道内に避難されたみなさまへの情報紙「からから便り」を発行します。

「からから便り」では、前年度北海道が行ったアンケート結果をもとに情報を提供するとともに、ここから先、これからの暮らしにつながる内容を心がけ、今年度4回発行します。

東日本大震災が起きてから、8年5ヶ月という時間とともに、子どもたちは成長し、大人たちは歳を重ねています。折り合いのつくこと、つかないこと、新たな

選択をすることや、これまでにない悩みが生じることもあります。ずっと変わらないこともあれば、急に変わることもあります。それは、誰も同じことだけれども、地震、津波、原発事故による避難がきっかけで北海道に暮らしているから、共有・共感できる思いを、「からから便り」を通じて、つないでいけたら幸いです。

紙面に掲載してほしいこと、寄稿文、ご意見・ご要望はお気軽にご連絡ください。

NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター

担当 金榮 知子

## 2019年度 北海道「道内避難者心のケア事業」の内容

**1** 情報紙「ここから これから からから便り」を発行します。  
発行予定：8月・10月・12月・2月

●情報紙とともに、交流会のご案内や支援団体などからお預かりした情報も同封してお届けします。みなさまの中で、「からから便り」とともに伝えたい情報（支援情報、イベント情報など）がある方は、お問い合わせください。

●情報紙は「ふるさとネット」の登録情報をもとに発送しています。今後、転居を予定されている方は、転居後「ふるさとネット」にご登録の住所変更をお願いいたします。また、情報紙の郵送を止めたい、「ふるさとネット」の登録を解除したい、という方も合わせてご連絡をお願いいたします。（P.8参照）

**2** 交流会の開催  
開催予定：  
10月（札幌・函館）、  
11月（旭川）、12月（札幌）

●開催が近づきましたら、ご案内をお送りします。

●10月は、北海道内にある宮城県を探す「ブラ歩き北海道★宮城を知るツアー」の開催を予定しています。

**3** 電話相談窓口  
電話 011-200-0973  
平日 10:00~17:00

●電話のほか、メールやファックスでもご相談を受付けています。

メール：[info@hnposc.net](mailto:info@hnposc.net)

ファックス：011-200-0974

●北海道 NPO サポートセンターは、道内各地の NPO、市民活動団体とのつながりがあります。ご相談の内容によって、お住まいの地域の窓口におつなぎすることができるかもしれません。お気軽にご相談ください。





なんぼろキャンプで  
ひろがる輪！

江別  
札幌 ● 南幌

# 福島の子どもたちを 南幌に招待する会

「琴の音色を子どもたちに聞かせたい」という思いで、2005年頃から学校・施設・ワークショップなどで演奏活動をしていた「なおこBAND」



## 音楽がっついてきた仲間たち

東日本大震災後、ボランティア活動のために真っ先に福島に渡ったのは、会のメンバーである菅原美枝さん（札幌市）です。何度も行き来をするうちに、『そろそろ物ではなくて音楽があつたらいいのでは』と感じ、「なおこBAND」のメンバー（大西直子さん、渋谷英利さん、ジエラルド・イルングさん）に相談しました。そして、「なおこBAND」は福島へ演奏訪問することを決意。その話を知り「車で行くなら持って行ってください」と、南幌町で農業を営む佐藤正一さんは300kgのじゃがいもを提供しました。

みなさん、もともと音楽活動や「なおこBAND」のライブを通じて知り合った方々です。

2012年3回の訪問で18か所、その後毎年訪問し、福島県新地町、南相馬市、福島市内の富岡町・双葉町などの仮設住宅や、訪問先の学童クラブ、保育園などで32回の演奏活動を行ってきました。

## きっかけは、 学童クラブの子どもたち

じゃがいも支援を続けていた佐藤さんが同行した3回目の福島訪問の時、メンバーが目にしたのは学童クラブの狭いホールを走り回る子どもたちの姿でした。放射線の影響を憂慮し外遊びを自主規制していたため、屋内で遊んでいたのです。「広々とした南幌に連れ

て行って遊ばせたい」と、誰もが思いました。

その思いから大西直子さんを代表として「福島の子どもたちを南幌に招待する会」の活動が動き出しました。北海道に戻り、候補地の南幌三重レークハウスに集まり、キャンプ開催の意思が変わらないことを確認。参加募集の窓口は、福島市にある「かぜの子学童クラブ」にお願いをしました。それから友人知人に連絡をしてスタッフを募り、募金活動やキャンプの準備を行い、なんと2013年8月、第1回目のなんぼろキャンプが実現しました。

それからは毎年継続し、これまで小学生124人がキャンプに参加しました。南幌町役場からはバスの貸し出しや温泉の入湯無料など、支援協力いただき、地元中学の吹奏楽部の爽やかな演奏が花を添えるチャリティーコンサートに町民が集い、バザーによる支援もいただきました。

## 南幌を中心に広がる輪

協力の輪はひろがり、南幌町民、音楽仲間、福島県から北海道に避難した方など、いろんな方が関わっています。キャンプが始まると、地元の婦人部の炊き出し、お寺のカレー夕食や農家さんの新鮮野菜の差し入れなど、たくさんの手が支えてくれます。キャンプ終了後には、支援いただいたみなさんへの報告会も開催しています。今年も7月31日から8月6日まで、福島の子どもたち19名がなんぼろキャンプに参加しました。

## 南幌町

は岩見沢市、江別市などに隣接する人口約7,500人の町です。農業の町であるとともに、札幌から25キロ圏内という近さから、ベッドタウンとしても発展してきました。稲作のほか「キャベツの町 南幌」と呼ばれるほどキャベツの生産が盛んで、町のマスコットキャラクターは「キャベッチ君」、特産品には「キャベツキムチ」があります。そのほか、ピーマン、長ねぎ、かぼちゃ、ブロッコリーなど食卓に欠かせない野菜を生産、防腐剤や保存料を一切使用しない秘伝のタレに漬けた「なんぼろジンギスカン」も有名です。町では、最大200万円の住宅建築費を助成する「南幌町子育て世代住宅建築助成事業」のほか、ニュータウンの土地代が半額になるタイアップキャンペーン、移住体験事業など様々な移住支援も行っています。



# 北海道開拓の歴史から



北海道の地名は、約8割がアイヌ語を由来としています。その地名とともに、本州から開拓団として移住した人たちの故郷が地名となっていることも特徴のひとつです。たとえば、道北では中頓別町岩手、オホーツクでは佐呂間町栃木、置戸町秋田、道央では砂川市宮城の沢、雨竜町国領の郡馬岳、倶知安町山梨、札幌市白石(宮城)などがあります。また、北海道伊達市は、宮城県仙台藩の巨理伊達家が由来です。

## 移住・入植の理由はさまざまです

戊辰戦争で敗れた会津藩士や仙台藩士、新天地を求めて開拓団に加わり、集団で入植した人や単独で入植した人、そして、凶作や大規模災害で被災した地域からの移住も多くありました。たとえば、明治22年の奈良県十津川災害(水害)で、十津川村から600

世帯以上、約2600名が移住し、新十津川村を拓いたことはご存知の方も多いいのではないのでしょうか。東日本大震災後、北海道への避難が一番多い時間で約3000人でしたから、それに近い規模で移住をした、ということになります。

## 災害だけではなく、人災によって移住した方々も

幕末から明治にかけて発展した足尾銅山が、銅の精製過程で出る有害物質

を渡良瀬川に流していたことにより川が汚染され、銅山から出る鉱毒がスナゴビにより山の木々は枯れ、禿山となっていました。やがて、川の水を利用して田園では作物が育てられなくなり、度々見舞われた大雨による洪水と、それに伴い禿山が崩れて土砂災害が起こり、有毒物質の流出はさらに広がり、渡良瀬川流域の集落は困窮していききました。

政府は、渡良瀬川の洪水を食い止めるために人工湖の建設を計画します。栃木県谷中村では強制買収、強制立退きがおこなわれました。そして、栃木県庁はその救済策として、谷中村を立ち退く一部の村民と、鉱毒罹災者に北海道開拓移民を斡旋し、明治44(1911)年4月7日、66世帯240名が北海道のサロママツ原野を目指し、故郷を後にしたそうです。

その方々は、入植した地に「栃木」と名付け、今も「ここは栃木からの入植者が開拓した地」だということを伝えていきます。(佐呂間町のホームページ

には「もう一つの栃木―栃木県足尾銅山の鉱毒流出と幾多の大水害に端を発した北海移民団の歴史―」というサイトがあり、様々な資料が掲載されているので、詳しくはこちらをご覧ください。)



## 北海道の中の 故郷をさがそう

北海道 NPO サポートセンターでは、こうした開拓によって北海道の中にあるみなさんの避難元をたどるツアーを企画し、これまで、福島県、宮城県ゆかりの地を訪ねてきました。回を重ねるうちに、開拓の歴史を知る方々、実際に入植してきた方やそのご家族との出会いが生まれています。

今年、7月20日に「ブラ歩き北海道★福島を知るツアー」を行い、三笠と美唄を訪れました。美唄には、小さな「相馬妙見神社」があります。神社といっても、畑の片隅で木に囲まれた中に、祠（ほこら）と石碑が置かれている小さな場所です。そこで、家族と



ともに、2歳の時に福島県浪江から開拓団として美唄に移住して来た小川富義さん(93)にお会いして、お話を聞くことができました。入植した時は幼かったけれど、何十年にも渡る開拓の中で、当時の様子をはっきりと語ってくれました。



「土もない、木もない、熊笹や葎が茂る原野を開拓し、馬を使って土を運んだ」「開拓では苦勞が絶えず、神にもすがる思いで福島に戻り、分霊してもらい、お札を持ち帰って神社をつくった」というお話から、開拓の大変さや同郷の仲間たちと励まし合いながら開墾した様子を知ることができました。今、開拓した農地は、息子さん、お孫さんと4世代目に引き継がれています。

日本各地から開拓で入植した方々は、苦勞が続く中、故郷と少しでも同じ環境を整え、心の支えにしていたのでしょう。そして、文化、風習、信仰を入植した地でも絶やさぬよう伝えてきた一方で、各地のさまざまな特色が共存し、今の北海道があることを改めて知ることができました。

※次回は、秋に宮城と北海道のつながりを探る、「ブラ歩き北海道★宮城を知るツアー」を実施します。



お話をしてくださった小川富義さん

### ■参考

「災害を契機とした北海道への移住事例」  
北海道大学 国土保全学研究室（大学院農学研究院）  
平成26（2014）年6月13日まとめ  
<http://lab.agr.hokudai.ac.jp/kokudohozen/archives.html>

佐呂間町ホームページ  
<https://www.town.saroma.hokkaido.jp/shoukai/saromanorekisi.html>



# 寄稿 1ページのたより

この春、息子は高校生になりました。毎朝お弁当を作るのって大変です。給食のありがたみと、同じようにお弁当を作ってくれた母への感謝の気持ちをしみじみ感じます。ふるさとの復興住宅でひとり暮らしをしている母に電話でそんな話をする、言われました。

「子育てに追われている最中は大変だけど、その大変だったときが幸せだったなあって後になってから気付くものだよ」と。

確かにそうかもしれません。妊婦だった頃、熟睡できない日が続いて早く生まれてきたらいいのにと思っていたのに、いざ生まれてみたらもっと寝る暇がなくなっていて、早く大きくなって手がからなくなっていてほしいと願ったことを思い出しました。今の私は、逆にずっと小さいままできてくれればよかったと思っています。あまりの手前勝手さに自分でも呆れます。

「一人っ子だから」というレベルではないマイペースさで、心配性な私の過保護さが惜しみなく発揮された息子も、いつの間にか声変わりし、髭を剃るようになり、遅ればせながら反抗期を迎えました。今やスマホやiPadを使いこなし、私が近寄ると画面を隠すいっぱしの思春期男子です。何とも健全な成長の証であ

り、喜ばしいことだと自分に言い聞かせつつも小言が出てしまい、毎日カチンときたりしています。今はまだ口げんかのようになっても、私が大人気なく言い負かしているのですが、そのうち息子に勝てなくなる日が来るのかなと思うと、楽しみなような悔しいような複雑な心境です。

生まれてから今日に至るまで、そのときどきで心配事は違うけれど、いつだって学校や友達や心身のことなど、子どもに関わることが大部分を占めてきました。親になるって時に苦行のように感じられて、自立した子どもを持つ世のお母さん方みんなすごいな、自分はダメな親だなと落ち込むこともしょっちゅうです。それでも、悲しい事件や痛ましい事故が毎日のように起こる中、日々小さな後悔や反省することはあってもこうして親子ともに元気に暮らせる

のはありがたいことです。早いもので札幌での生活も丸8年超。高校3年間もきつとあつという間ですね。実感はないですが、高校卒業という子育てにおける大きな節目がすぐそこに迫っています。進路は本人の希望や努力にもよるのでどうなるか分かりませんが、いずれにしても、自立への一歩として（むしろ、私の子離れのためかも）一人暮らしをさせようと夫と話しています。私は必然的に避難元に戻ることになるわけですが、これまでは帰還について考えるのを避けていました。でも今回、こうして原稿を書く機会をいただいて、震災以降の日々を振り返りながら書いては消すのを繰り返しているうちに、息子の卒業までの時間は、私自身、今後に向き合うための期間でもあることに気付きました。

こんなに長く離れていた夫との二人暮らしが想像できなくて、戻ってうまく馴染めるか正直不安です。けれども、夫は夫で、仕事も家事も一人でこなす大変さや子どもの日々の成長を間近で見られない寂しさ、職場には母子避難させている同僚がない肩身の狭さなどを抱えながら支えてくれたこと、お互いの8年間を思えば、何とかやっていけるような気がします。今は少しずつ準備をはじめつつも、お弁当作りから始まる慌ただしい何気ない日々を大切に暮らしていこうと思います。

夏休み最終日に宿題に追われる子どものように、夜更かしして書き上げた取り留めのない話にお付き合いいただき、ありがとうございます。

(匿名希望)



子育てもあと少し。日々を大切にします。

自分らしく、生き生きと働ける場所を！ アクティブシニアサポートセンター

「私は、東日本大震災により旭川に移住して8年になります。この8年間は、北海道に慣れることに必死でした」

「アクティブシニア・カフェ」の体験発表者として講演したS・Hさん(63)は、震災で自宅を損壊し、温暖ないわき市から息子さんが暮らす旭川市へと移住しました。

「一緒に移住した愛犬が2年前に亡くなったことで、なにかもがなくなってしまうように感じ、引きこもる生活を送っていました。でも、今年、平成から令和へと時代が変わるとき、私も今の生活から抜け出して何かしよう、しなくては！と思いました」

もう一度働いて、自分らしく生き生きと生活しよう、と求人募集などで仕事を探しましたが、なかなか働く場所を見つけれません。思いを募らせ、被災者相談窓口に電話したときに、アクティブシニアサポート

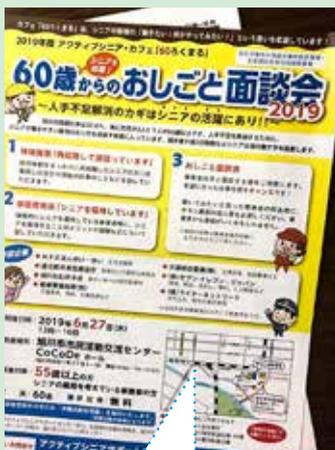


センターの紹介をうけたそうです。

「就労体験をしながら仕事探しができるので、未経験の仕事でも大丈夫、と聞き、安心と期待と働くことへのワクワク感でいっぱいになりました」

センターに登録後、最初に採用された職場は環境が合わず、10日ほどで退職。再び、引きこもる生活に戻ろうかと思っていたところに、センターの相談員さんから電話がきました。仕事を辞めたことを伝えると、「もう一度良い職場を探してチャレンジしてみよう！」と背中を押され、気持ちを切り替えて、頑張っていこうと思えたそうです。

「おかげで、今は病院内での洗濯業務について働き始め、もうすぐ一ヶ月になります。娘のような女の子が親切に指導をしてくださって、もうすぐ独り立ちです。私たちシニアは、体力・記憶力は劣っているけれど、働きたい気持ち、働く意欲は若い方々と同じです。ですから、これからもシニア世代を一人の小さな働き手として見ていただきたいと思います」



アクティブシニアサポートセンター旭川では、55歳からの就職活動をサポートしています。仕事をしたくても、自力で就労機会を見つけることが難しくなっているなか、センターでは、シニアを雇用したい企業と、仕事を求める方とのマッチングを行っています。

名称：**アクティブシニアサポートセンター 旭川**

住所：〒070-0032 旭川市2条通7丁目 マルカツデパート5階 旭川まちなかしごとプラザ内

開所日：火～土曜日 午前10時30分～午後7時

電話：**080-2878-8969**

ホームページ（アクティブシニア55）：<http://activesinior55.com>

実施：社会福祉法人 北海道社会福祉協議会

実施主体：NPO法人 北海道社会的事業所支援機構

アクティブシニアサポートセンターは、旭川のほか室蘭、帯広、紋別にあります。

室蘭：〒051-8511 室蘭市幸町1-2 室蘭市役所産業振興課内 電話：080-2867-2527

帯広：〒080-8677 帯広市西2条南8丁目 藤丸百貨店7階 電話：080-2867-2530

紋別：〒094-0004 紋別市本町4丁目1-27 まちなか休憩所内 電話：080-8628-5929

# 北海道における被災避難者の受入状況

[2019年7月10日現在]

※北海道のホームページでもご覧になることができます。



単位：人

	岩手県	宮城県	福島県	その他	合計	
石狩	札幌市	19	170	479	105	773
	江別市	4	14	36	0	54
	千歳市	3	16	17	0	36
	恵庭市	0	0	33	0	33
	北広島市	0	2	13	4	19
	他2市町村	0	1	7	0	8
空知	岩見沢市	1	8	14	0	23
	他10市町村	0	7	20	0	27
後志	小樽市	0	4	19	9	32
	他5市町村	0	3	7	0	10
胆振	苫小牧市	4	19	10	0	33
	他6市町村	0	10	17	0	27
日高	2市町村	0	0	7	7	14
渡島	函館市	6	31	84	17	138
	北斗市	2	4	15	0	21
	他2市町村	0	0	8	0	8
檜山	3市町村	1	6	2	0	9
上川	旭川市	5	26	50	9	90
	他10市町村	3	8	17	9	37
宗谷	1市町村	0	0	0	1	1
オホーツク	北見市	0	2	13	0	15
	他6市町村	0	4	12	0	16
十勝	帯広市	4	3	18	6	31
	他1市町村	0	3	0	0	3
釧路	釧路市	2	17	12	8	39
	他1市町村	0	0	1	0	1
根室	1市町村	0	2	0	0	2
総計	64市町村	54	360	911	175	1,500

## 避難者相談窓口

### NPO 法人 北海道NPOサポートセンター

電話：011-200-0973

平日 10:00 ~ 17:00

FAX：011-200-0974

メール：info@hnposc.net

〒064-0808 札幌市中央区南8条西2丁目5-74  
市民活動プラザ星園 201



地下鉄東豊線 豊水すすきのの駅6番出口  
地下鉄南北線 中島公園駅1番出口

## 全国避難者情報システム「ふるさとネット」の登録について

「からから便り」は「ふるさとネット」の登録情報をもとに発送しています。「ふるさとネット」は北海道が運用する被災避難者サポート登録制度です。この制度は自治体の転入届とは連動しておらず、転居の場合は住所変更のご連絡をいただかなければ、郵送物が「所在不明」として返送されてしまいます。転居、登録解除など、「ふるさとネット」の登録内容に変更がある場合はご連絡ください。

### ■連絡先

- ① NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター
- ② 北海道総合政策部地域振興局地域政策課地域政策グループ  
電話：011-204-5800  
メール：shienhonbu@pref.hokkaido.lg.jp
- ③ 避難先市町村の担当窓口（市町村により部署が異なります）

## 編集後記

当初から遅れての発行になりましたが、「からから便り」第1号を無事に発行することができました。これまで親しまれてきた「からから」を引き継ぎながら、新しいコンセプトのもとに発行することを示すために「からから便り」という名前にしました。避難を経験した方々にも編集チームに加わってもらい、読んでいる方々の思いや不安、悩みが共感・共有できる紙面づくりを心掛けました。人と人が繋がる紙面づくりに向けて試行錯誤をしているところです。読んでいる皆さんと共に作りあげていく情報紙にしていきたいと思っておりますので、紙面に関する率直なご意見をお待ちしています。（定森）